３	学校名　住田町立世田米小学校　外４校	２９～２

令和元年度研究開発実施報告書

１　研究開発の概要

（１）　研究のねらい

岩手県の中山間地域に位置し、豊かな自然に恵まれた住田町では、教育振興基本計画基本目標「生涯学び続け、新しい時代を切り拓く心豊かな人材の育成」の基に、自立して生き抜く力や協働する力、豊かな人生や地域づくりを主体的に創造する力を身につけた人材育成を目指し、これまでもその風土を生かした教育を推進してきた地域である。しかしながら、時代の潮流の中、中山間地域における地域課題に直面している現実もまた事実である。本町が、将来にわたって持続可能な町の姿を描く上でも、ふさわしい資質・能力を獲得しながら自己の人生や社会を創造できる人材育成を目指すことは、今後ますます不可欠であり、時代が今後どのように変化を遂げても不易な考え方である。したがって、本町で学ぶ子どもたちに、町内の小・中学校及び県立高校が一体となって具体的に育むべき資質・能力を明らかにしながら、着実に育成することができるよう、全町を挙げた教育の展開を試みる研究開発に取り組む。

（２）　研究の方針【図１－１：住田町研究開発グランドデザイン】

前述の研究のねらいを踏まえ、本研究開発においては、小・中学校及び高等学校が育成を目指す資質・能力を共有し、一体的に推進する教育を展開する。具体的には、１２年間を通して、「子どもたちが変化の激しい社会において、充実した人生を実現していくために、豊かな心を持ち、自ら主体的に未来の社会を創造していくことのできる力（社会的実践力）の育成」を目指す。そのために、住田町内の教育の特色を生かした教科「地域創造学」を新設し、これを中核に位置付けた１２年間の教育課程の編成と、その指導方法及び評価方法等の開発を行っていく。以下大きく３点について、具体的な研究実践をとおして提言を行う。

○　「社会的実践力」を育むため「地域創造学」を据えた教育課程の編成をすること
○　「社会的実践力」を効果的に育む指導方法を探ること
○　「社会的実践力」を評価するための具体的指標の開発を行うこと

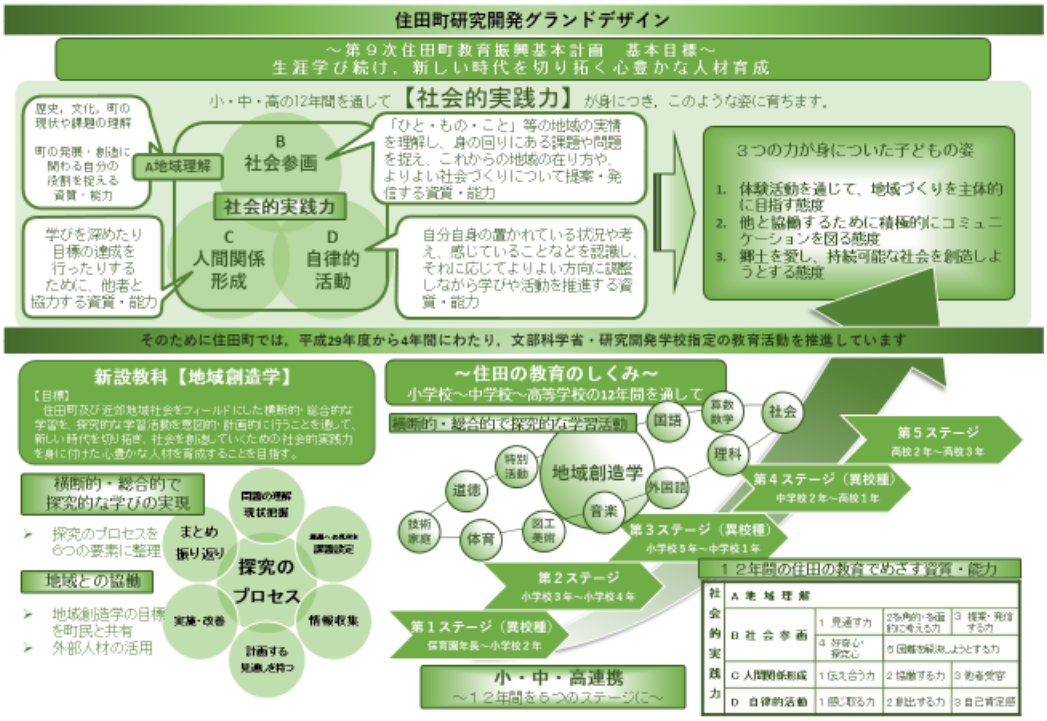
（３）　研究仮説

新教科「地域創造学」において、小学校から高等学校までが、新しい時代を切り拓き社会を創造していくための社会的実践力の育成を共通に目指し、以下の手立てを講ずることにより、自立して生き抜く力を身に付け、他者と協働してより豊かな人生や地域づくりを主体的に創造することのできる人材を育成することができるであろう。

そのために具体的な手立てとして、以下の５点に取り組む。

①　新しい時代を切り拓くために必要とされる資質・能力（社会的実践力）の規定
②　社会的実践力を育成するための教育課程の編成や効果的な指導方法の開発
③　社会的実践力の育成を評価するための具体的指標の開発
④　教育課程の特例による教科「地域創造学」の創設と授業実践
⑤　新設「地域創造学」に関するアンケート調査や外部評価の効果的な活用と教育課程等の在り方の検証

【図１－１】　住田町研究開発グランドデザイン



（４）教育課程の特例

全学年での地域創造学の実施にあたり、地域創造学の教科時数を以下のとおり位置付けた。

① 小学校では、生活科、道徳、外国語活動及び総合的な学習の時間を減じて、全学年において「地域創造学」を１年生１０６時間、２年生１１０時間、３、４、５、６年生では８５時間実施した。

② 中学校では、全学年において、道徳、外国語及び総合的な学習の時間を減じて「地域創造学」を１年生では６２時間、２、３年生では８２時間実施した。

③ 高等学校においては、１学年においては総合的な探究の時間を減じて、２、３学年においては総合的な学習の時間を減じて、「地域創造学」をそれぞれの学年で１単位３５時間実施した。

２　研究開発の経緯

（１）研究の経過

	実施内容等
第３年次	（１）新教科「地域創造学」の実施と改善 ①　小中高１２年間の系統的教育課程の実施と修正 ②　新教科の評価規準と評価方法の修正 （２）小中高の系統的指導のための各種合同研修会等の実施 ①　小中高１２年間の実践交流と研究協議 ②　新設教科と既存の教科の関係性についての分析・探究 ③　育成したい資質・能力の育成に向けて、意欲的に授業に取り組ませる指導方法の工夫・改善 ④　授業実践を通した教材の開発と改善 （３）社会的実践力の把握と分析

	①　児童・生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査 ②　各種調査（全国学力・学習状況調査や心理尺度等）との関連についての分析・評価及び、次年度の評価準備 （４）研究開発実施に関する体制の整備 ①　運営指導委員会による評価をもとにした第３年次のまとめと第４年次の計画作成 ②　地域創造学協力者会議の実施 ③　保護者・地域との連携のため、周知、広報活動等の展開 ④　町立保育園を幼保連携型認定こども園へ移行する準備

（２）評価に関する取組

	評価方法等
第３年次	（１）研究開発委員会と運営指導委員会（年３回）の開催 ①　第３年次及び３年間の研究についての指導・助言 （２）第２年次の評価を基に実践的研究を行い、児童・生徒の変容等を評価 ①　「非認知的能力の見取り」及び「認知的能力の測定」双方の実施 ②　教育達成測定、パフォーマンス評価等を用いた児童・生徒への学習評価の実施 ③　全国学力・学習状況調査、岩手県小・中学校学習定着度状況調査、岩手県中学１年生英語確認調査（CAN-DOテスト）、岩手県中学校新入生学習状況調査、岩手県高等学校１年・２年基礎力確認調査による、新教科「地域創造学」の目指す資質・能力の観点からの分析、評価 ④　児童・生徒、教職員、保護者・地域住民へのアンケート調査による社会的実践力の把握と分析 ⑤　県立住田高等学校の卒業生に対する進学・就職状況、社会的実践力に関するアンケート等の追跡調査の実施 （３）小・中・高等学校の一貫した教育課程の在り方について、各校の実践事例交流と、成果・課題の明確化 小・中・高等学校教員が参加する全体会を４月、７月、１月、２月に開催した。

３　研究開発の内容

（１）　教育課程の編成に向けて

①　社会的実践力の系統表、年間指導計画及び学習指導要領解説に基づいた授業実践について

今年度は、小学校から高等学校まで全ての校種が、全学年において昨年度に試案として作成した社会的実践力の系統表、年間指導計画【３－１】、学習指導要領解説【３－２】に基づいて新設教科「地域創造学」の実践を行った。特に小・中学校における年間指導計画ではそれぞれの学年に「共通単元」を設定し、二つの小学校・中学校の児童生徒同士による交流場面の創出にも取り組みながら、実践を重ねた。また、昨年度に引き続いて、他校の教員が各学校で実施する校内授業研究会に参加することのできる、相互交流事業を実施した。

【表３－１】令和元年度地域創造学年間指導計画（小学校第４学年第２単元一部抜粋）

単元の指導　（全　17 時間　※有住13時間）

プロセス	月	時（有住）	小単元名	主な活動内容と関連する教科・領域	働かせたい資質・能力 A	B	C	D
問題の理解 現状把握	4・5	1	と	○オリエンテーション ・知りたいこと、やってみたいことを出し合い学習の意欲付けを図る。 ・お年寄りについてのイメージを広げ、認識を共有する。（ウエビングマップ） ・自分のおじいちゃん、おばあちゃんは分かるけど、住田にはどんなお年寄りがいるんだろう？		見		
課題への気づき 情報収集		1		○社会福祉協議会の方をお招きし、住田町の施設の様子や介護状況、お年寄り達の様子や気持ちを聞き課題を見出す。 ・収集した情報の整理や分析が容易になるよう、学習シートなどを工夫しインタビュー活動を行う。 ・住田町社会福祉協議会（46－2300）※仮予約済み　新年度日程を詰めて再度連絡 ・お年寄り達のために、施設にはいろいろな工夫があるな。	地理	見	受	
情報収集 課題設定		3（2）		○キャップハンディ体験を通し、年をとることによる体の不自由さや、どのような接し方がよいのかを考える。 ・岩手県立福祉の里センターに依頼し、下肢障がい体験（車椅子）・高齢者疑似体験を行う。 （予約が殺到するため、早めの予約が必要） ・岩手県立福祉の里センター（℡27－0294） 【国語】だれもが関わりあえるように「手と心で読む」 ・体が思うように動かないな。	地理	好		肯

【表３－２】学習指導要領解説地域創造学編（目次）

目次

第１章　総説 1
第１節　すみたの教育理念 1
第２節　創設の経緯 3
第３節　地域創造学の意義 5
第４節　学びの５つのステージ 7
第２章　地域創造学の目標及び内容 9
第１節　地域創造学の目標 9
1　地域創造学で目指す横断的で探究的な学習活動 9
2　意図的・計画的に行うこと 10
3　新しい時代を切り拓き，社会を創造していくための社会的実践力 11
4　心豊かな人材を育成すること 12
第２節　地域創造学で育む社会的実践力 14
1　社会的実践力を構成する資質・能力 14
2　５つのステージに基づく社会的実践力の系統性 20
3　各教科等との汎用的な資質・能力 24
第３章　指導計画の作成 30
第１節　指導計画の方針 30
第２節　指導計画の構成 31
第３節　指導計画の作成にあたっての配慮事項 33
第４節　推進体制の確立 39
1　住田町における運営体制 39
2　各学校における推進体制 41
第４章　地域創造学の学習指導 43
第１節　児童生徒の主体性の重視 43
1　主体性を生み出す学習課題の設定 43
2　主体的な学びにつながる工夫 44
第２節　地域創造学の特性を生かした学習指導の展開 48
1　多様な学習展開の工夫 48
2　他地域や類似の事例にも学ぶ 49
3　多様な考えを生かす言語活動 50
4　家庭や地域社会との連携による指導 54
第５章　地域創造学の評価 56
第１節　評価の基本的な考え方 56
第２節　評価の方法及び工夫 58
1　児童生徒自身による学習評価 59
2　教師による評価 61
第３節　指導改善に生かす工夫と留意点 63

地域をフィールドにした横断的で探究的な学習活動を行うことを通して社会的実践力を身に付けた人材を育成することを目指すこと、児童生徒の主体性を重視した指導方法の在り方、評価の基本的な考え方等が記載されており、校内授業研究会の相互交流では指導方法や評価方法に関して、校種を越えて活発に議論が交わされた。

② 年間指導計画の見直しについて

日常の授業及び授業研究会等を通じて、社会的実践力の系統表と照らし合わせなら、社会的実践力を育成していくための内容となっているか等について議論を重ね、年間指計画の見直しを行った。冬休みから３学期にかけて「学習指導検証部会」を中心に、全校種が集まる見直しの機会を定期的に設定し、どのように評価するのかをより分かりやすくするための様式等も含めて、さらに修正【表３－３】を図った。令和２年度の年間指導計画に関しては、令和元年度までの実践をできるだけ生かしながら、部分的に修正を加えたものである。令和３年度の年間指導計画に関しては、より系統性を重視したものにしていくために、学習指導検証部会を中心に、大幅な修正を加えていくことを検討している。

【表３－３】修正した令和２年度地域創造学年間指導計画（小学校第４学年第２単元一抜粋）

単元の指導　（全　17　時間・・・有小13時間）　（ ）内は、有小時間

月	小単元名	プロセス	時	主な学習活動	関連する教科・領域	評価項目（評価方法）
4・5	ともに生きる～やさしい町　住田町～	問題の理解 現状把握	1	・お年寄りについてのイメージを広げ、認識を共有する。（ウエビングマップ） ・自分のおじいちゃん、おばあちゃんのほかに、住田にはどんなお年寄りがいるか考える。 ・お年寄りの方々が大変なことや困っていることを考える。 ・一緒にできる楽しい活動や触れ合う活動を考える。		・B1　☆見通す力（学習シート）
		課題への気付き 情報収集	1	・社会福祉協議会の方をお招きし、住田町の施設の様子や介護状況、お年寄り達の様子や気持ちを聞き、課題を見出す。（住田町社会福祉協議会（46－2300） ・お年寄りの方のために、いろいろな施設や施設の工夫があることに気付く。 ・介護士の方達は、お年寄りたちが気持ちよく生活できるように、いろいろ考えていることを知る。	【国語】だれもが関わり合えるように「手と心で読む」	・B1　☆見通す力（学習シート） ・C3　★他者受容（振り返り）
		情報収集 課題設定	3（2）	・岩手県立福祉の里センターに依頼し、高齢者疑似体験を行う。（予約が殺到するため、前年度計画の段階で予約する。）・岩手県立福祉の里センター（TEL27－0294）※前年度中に申請する。 ・体が思うように動かないこと体験する。 ・声をかけてから動かすことが大切なことを知る。 ・お年寄りの大変さを感じながら体験する。		・B4　★好奇心・探究心（振り返り） ・D3　★自己肯定感（チェックリスト）
		計画する 見通しをもつ	1	・相手意識をしっかりともち、よりよい活動になるよう計画づくりを行う。 ・おじいさんおばあさんの大変さを知り、もっと仲良くする方法を考える。 ・どんなことをやったら、喜んでくれるか話し合う。		・B1　☆見通す力（学習シート）
		実施・改善	4（2）	・運動会で披露する伝統芸能を、交流会で披露することを見据え、練習や準備活動をする。 ・地域の伝統芸能の練習をする。 ・キャップハンディ体験で学習したことを生かして交流できるように考える。		・B2　☆多面的・多角的に考える力（ポートフォリオ） ・C2　☆協働する力（振り返り） ・D2　☆創出する力（学習シート）
6		実施・改善	2	・お年寄りの方々が喜んでくれることをみんなで考えて交流する。 ・お年寄りの人達の喜んでくれることを知り、地域のお年寄りと関わるときに生かしていけることを考える。		・B4　★好奇心・探究心（ルーブリック） ・B6　★困難を解決しようとする心（振り返り）
		まとめ 振り返り	2	・自分たちがしたことを友達に教える方法を考える。 ・おじいちゃん・おばあちゃんと一緒に交流できたことを伝える。 ・交流会をしてよかったことを伝える。	【道徳】相互理解「おせなかった車いす」 【社会】事故・事件のないまちを目ざして	・B3　提案・発信する力（ポートフォリオ）

③ １２年間の教育課程と指導方法、評価方法等の開発について

小学校から高等学校までの全学年において社会的実践力の系統表、年間指導計画、学習指導要領解説に基づいて新設教科「地域創造学」の実践を行った。異校種の教員が参加する授業研究会等を通じて、社会的実践力を育成していくための内容となっているか、児童生徒の主体性を重視した指導方法がどうあるべきなのか等について議論を重ね、年間指導計画の見直しを行った。

評価方法の開発に関しては、「評価検証部会」を中心に、児童生徒の社会的実践力がどのように身についたのか見取るための評価の方法について検討を行った。全ての学校の教員が実践交流を行いながら、特にパフォーマンス評価の在り方に関する検討・協議を進めることができた。年間指導計画に基づくルーブリックの示し方などに関してより一層共通理解を図っていく【表３－４】。

【表３－４】　年間指導計画に基づくルーブリックの作成例

パフォーマンス課題	もっと調べたいところやその理由、どんなことを調べたいかについてワークシートに記入する。
みとる資質・能力	B1 社会参画に関する資質・能力　☆見通す力
評　価	パフォーマンスの特徴
A	学習課題の解決に向けて、探検活動で見つけたことをもとにして、詳しく調べたいことを記述したり発表したりしている。また、詳しく調べたい理由を明確にして考えている。さらに、調べたい内容について、町探検を通して関わった場所や人、発見したことをもとにして記述している。
B	学習課題の解決に向けて、町探検で見つけたことをもとにして、詳しく調べたいことを記述したり発表したりしている。また、詳しく調べたい理由を明確にして考えている。
C **（支援の手立て）**	教師との対話により、１回目の町探検や友達の考えを参考にしながら、探検でどんなことを調べたいかを考えることができるようにする。

また、新設教科「地域創造学」の実施による児童生徒の学習の変容や、学習への達成感をとらえる一手法として検討した、教育達成測定を今年度はじめて実施した。設定した質問項目をとおして、教職員全体で具体的な子供の育ちの姿を共有することができるよう、教師の見取りとあわせて有効活用していきたい。また、測定の精度を高め、その妥当性を検証するため、本町と地域環境が類似している県内の中山間地域での小・中・高５校に協力を依頼し、同じ教育達成測定を実施し、比較検証を行った。来年度まで計８回実施し、１２の資質・能力がどのように児童生徒に身についているのかを検証した上で、さらに効果的な地域創造学の単元構成や指導方法、評価の在り方を追究していきたい。

さらに、全体的な変容だけでなく、一人の児童生徒がどのように変容したのかについて、継続的に評価していくために、児童生徒の学びのプロセス・成長過程を蓄積していくポートフォリオ評価の在り方をさらに検討していきたい。

④　地域創造学で育む資質・能力と各教科等で育む資質・能力との関連について

研究２年次は、学校カリキュラム検討部会を中心に、地域創造学と各教科との関連を検討し、第２次案として【表３－５】のように作成した。第３年次は【表３－５】を基にして実践を行ったが、さらに、現場の教員が各教科との関連を意識し、活用しやすくするため、教科名・単元名・資質能力の記号を付した第３次案【表３－６】を作成した。

今年度９月に住田高校で行われた文部科学省の実地調査においては、地域創造学だけでなく、教科横断的な視点で資質・能力を育成することが大切であることを視学官からご指導いただいた。各学校の校内研究の取組と連携し、各教科等の指導改善の状況をみとり、教師側の意識の変容についても研究成果の評価材として取り入れたい。

【表３－５】社会的実践力のとらえと教科・領域との関連検討表の一部

社会的実践力のとらえと教科・領域との関連検討表（小学校１学年版）

資質・能力の分類	定義	A～Cに関する各資質・能力	創造	幼児教育	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図工	家庭	体育	道徳	外国語	特活
A．社会参画力	「ひと・もの・こと」等の地域の実情を理解し、身の回りにある課題や問題を捉え、これからの地域の在り方や。よりよい社会づくりについて提案・発信する資質・能力	1．地域理解	◎		○						○			○		
		2．見通す力	◎		○		◎						○			○
		3．多面的・多角的に考える力	◎		○		○				○		○	◎		○
		4．提案・発信する力	◎		◎		○			○	◎		○	○		○
		5．好奇心・探究心	◎		○		○			○	○		○			○
		6．困難を解決しようとする心	◎		◎		◎			○	○		○	◎		◎
B．人間関係形成	学びを深めたり、目標の達成を行ったりするために、他者と協力する資質・能力	1．伝え合う力	◎		◎		○			◎	○		○			○
		2．協働する力	◎		○		○			◎	○		○	○		◎
		3．他者受容	◎		◎		◎			○	○		○	◎		◎
C．自律的活動	自分の置かれている状況や考え、感じていることなどを認識し、それに応じてよりよい方向に調整しながら学びや価値動を推進する資質・能力	1．感じ取る力	◎		◎		◎			○	○		○	○		○
		2．創出する力	◎		◎					○	◎		○	○		○
		3．自己肯定感	◎		○		○			○	○		○	◎		◎

※各教科・領域において関連性の強い単元

国語・・・　おおきくなった，たからものをおしえよう，すきなことなあに，くじらぐも，しらせたいな、見せたいな，じどう車ぐらべ，ともだちに，きいてみよう，てがみでしらせよう，これは、なんでしょう，どぼうぶつの赤ちゃん，いいこといっぱい、1年生，こんなことをしたよ

算数・・・　たしざん，ひきざん，かたちあそび，おおきいかず，どちらがひろい，ずをつかってかんがえよう，かたちづくり

生活・・・

音楽・・・　うたでなかよしになろう，はくをかんじてあそぼう，はくをかんじてリズムをうとう，おとをあわせてたのしもう

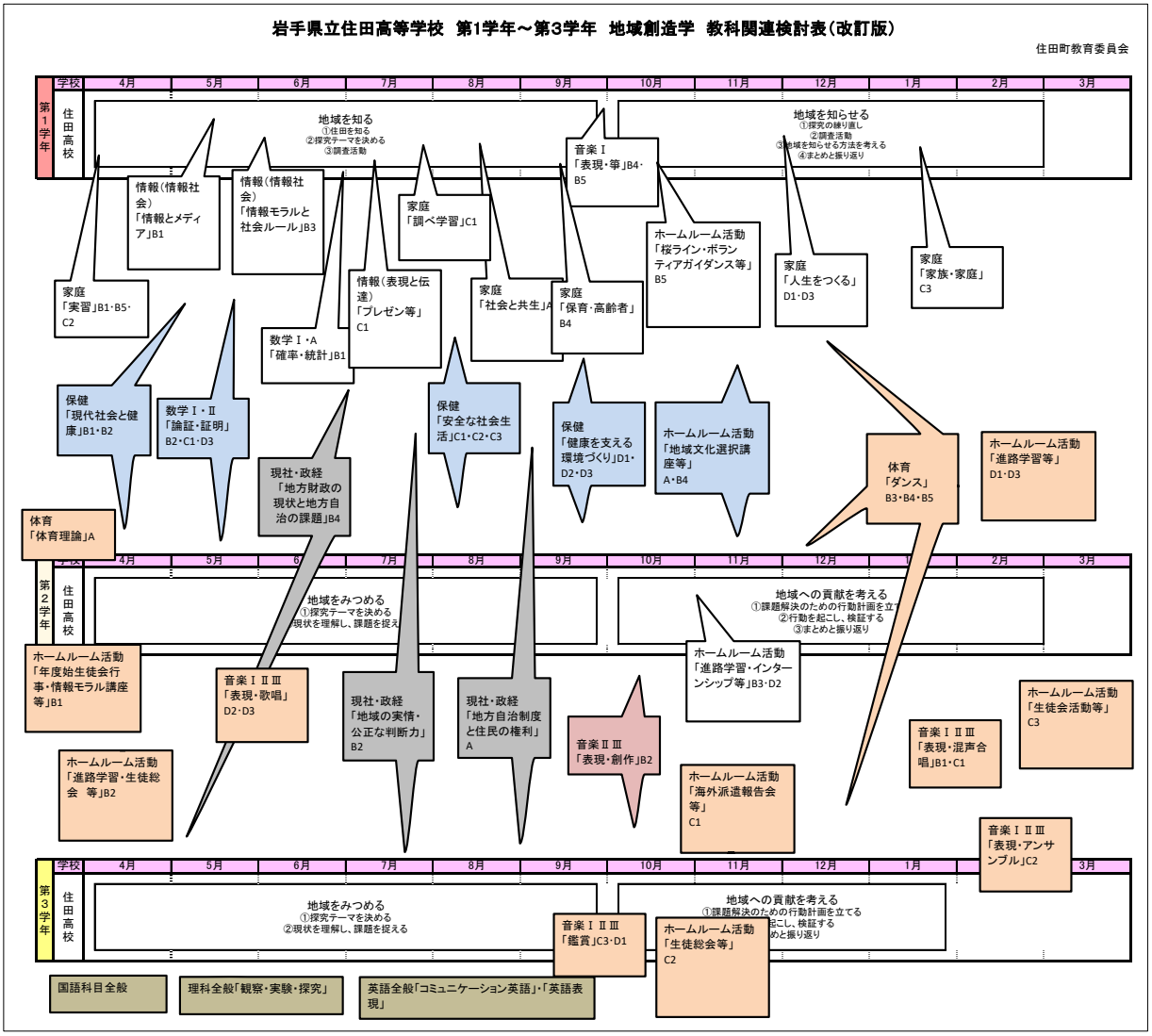
図工・・・　どんどんかくのはたのしいな，すなやつちとなかよし，いろいろなかたちのかみから，せんせいあのね，おってたてたら，コロコロべったんシャカシャカ，やぶいたかたちからうまれたよ，はこでつくったよ

体育・・・　体ほぐしの運動，多様な動きをつくる運動遊び，走・跳の運動遊び，水遊び，ボールゲーム，鬼遊び，表現遊び

道徳・・・　あいさつ，ことばづかい，おせわになっているひと，ともだちとのこと，じぶんのよいところ，じぶんでできること，だれにでもこうへいに，みんなのためにはたらく，わたしたちのまち、うつくしいもの

特活・・・　全般

【表３－６】教科領域との関連検討表（第３次案）



⑤　第３年次学校公開研究会の実施について

これまでの研究成果を基に研究発表、授業公開、授業研究会を行った【表３－７】。授業研究会においては、地域資源を題材にした小・中・高の１２年間のつながりのある学びをさらに効果的なものしていくための内容や指導方法、異校種間連携を円滑に進めていくための工夫、地域との連携の強化を図っていくためにとるべき手立てなど、たくさんの貴重なご意見をいただいた。これらのご意見を真摯に受け止めながら、年間指導計画の見直しや指導実践の積み上げをさらに精力的に進めていく。

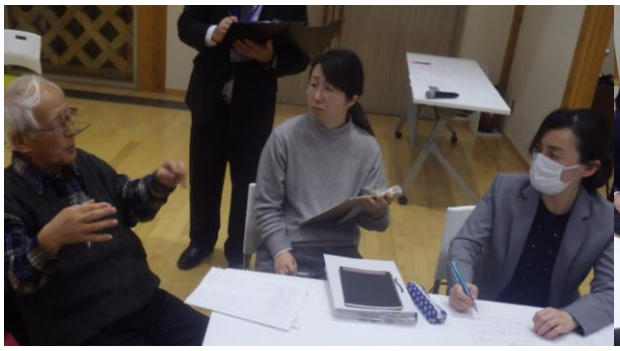
【表３－７】第３年次学校公開研究会学習指導案（住田高校第４ステージ：本時の展開案部分）

段階	学習内容・学習活動	※指導上の留意点　◆評価
導入５分	１　本時の進め方の確認 発表・質疑応答→付箋記入 ２　本時の発表会（課題）の確認 課題　【発表者】自作したガイドブックに関してわかりやすく発表する。 【聴衆者】発表に対しての質疑応答、アドバイス・意見などを述べる。	・時間や進め方などを確認する。
展開３５分	３　発表・質疑応答（計３分） ・発表者：自作したガイドブックについて、調査活動や作成時の工夫点、ガイドブックの広め方など、オーディエンスにわかりやすく説明する。 質問や意見に対して答える。 ・聴衆者：メモをとりながら発表を聞き、アドバイスや意見などを述べる。 ４　付箋記入（２分） ・聴衆者：質疑応答の際に述べた内容などを付箋に記入し、発表者へ渡す。	・発表者が物怖じせずに大きな声で発表し、聞き手が質問できるように各グループを巡回し、配慮する。 ・全員が発表し、自己評価シートの記入、本時の振り返りまでできるように時間の管理をする。 ◆【発表者】生徒各自が調査研究し、ガイドブックとして発信していくうえで、構想発表会での振り返りをもとに工夫をしながら、聴衆に対してわかりやすく発表をしている。（発表） ◆【聴衆者】発表者の考えに対してその価値を認識するとともに自分の考えを述べようとしている。（質問・意見、付箋）
まとめ１０分	５　本時の振り返り ・自己評価シートへの記入 ６　今後の取り組みについての確認 ・ガイドブックの設置およびアンケートの依頼	・ガイドブック作成のために、調査・研究を重ね、自分から発信していくことの意義を確認する。 ・今までの活動を振り返りながら、自己評価を行う。 ・ガイドブックを実際に置いてくれる施設などへの依頼や、アンケートの作成・依頼について説明する。

住田の魅力や地域資源についての理解を深め、ガイドブックの形でその魅力を表現する単元の週末部分における発表の授業であり、発表者は相手意識を持って魅力をわかりやすく伝えることに留意し、発表を聴く聴衆者も他者の発表に対して、多面的・多角的な視点から質問や意見・アドバイスを述べることが目標として示されていた。本時でねらっている資質能力はそれぞれ、「伝え合う心」と「感じ取る力」になる。公開前に町内の中学校で行われた授業研究会の中で、発表会における発表者だけでなく、聞き手をどのように指導し、評価していくのかということが議論された。この授業は、その議論が生かされた、聞き手の視点を大切にした授業の一例であるといえるとともに小・中・高の授業交流事業の一つの成果であるととらえられる。

⑥　第１回地域創造学協力者会議の実施について

今年度「第１回地域創造学協力者会議」を実施したところ、地域創造学のゲストティーチャーとして協力した地域の方々約４０名の出席があり、各学校の代表者、町教育委員会とともに、よりよい地域創造学の在り方について協議することができた。地域の方々からは、「事前にこのようなことを学習してきた方が、調査活動がより意味のあるものになる」など、「どのような力を育成しようとしているかについて授業前に担任の先生と共通理解を図りたい」など指導計画の在り方に関して助言してくださる方々も多く見られた。学校だけでなく地域全体で地域創造学を進め、地域全体で児童・生徒を育てていくのだという意識の高まりであると捉えている。第四年次も継続して会議を実施し、地域の方々と地域創造学を行ったことによる児童生徒への効果を共有し、地域全体で社会的実践力を育成していくためのよりよい方策について検討していく。



（２）実施した指導方法等について

地域創造学の指導方法の工夫・改善を以下①～⑤の視点で行った。

① 探究のプロセスの往還を意識した指導方法の在り方について

地域創造学では「①問題の理解、②課題設定、③情報収集、④計画・見通し、⑤実施・改善、⑥まとめと振り返り」というプロセスが発展的に繰り返される「探究的な学習過程」を重視した学習を展開している。昨年度の実践から、６つのプロセスは①～⑥の一方向に限定せず、児童・生徒の進行状況を詳細に見とりながら、学習状況に応じてプロセスを往還することなども含めて、探究活動を柔軟に行わせることが大切だということがわかった。今年度は、①から④のプロセスの段階に関しては、教師が共に考える視点を持って、児童・生徒に問いを繰り返しながら視点や思考を広げていくことの重要性について、授業研究会や全体会を通して共通理解を図ることができた。今年度の実践を踏まえ、今年度取り組んだ探究のプロセスの妥当性について検討し、次年度計画の作成に活かしていく。

授業実践例　世田米小学校第６学年地域創造学　「考えよう　私たちの未来」より

住田のよさや課題、課題解決の方法について、主体的な探究活動となるようねらいを持って実践が行われていた。情報収集と実施改善のプロセスを何度も往還する児童の姿が多く見られ、学びの深まりが探究意欲の高まりにつながっていく様子が見られた。

② 体験活動を伴う学習活動の指導方法の在り方について

児童・生徒が学びの意義や価値について実感を持ちながら学習が展開できるよう、特に、体験活動を伴う学習活動の指導方法の在り方について考える実践に継続して取り組んだ。

以下は、本年度、各校種で地域創造学に位置付けた体験活動の種類をまとめたものである。第１ステージから第２ステージは、地域の良さに気づき地域の理解を深める活動を、第３ステージから第５ステージにかけては町の課題に主体的に向き合い、課題を知ることや課題解決に取り組む探究活動を取り入れていくことができた。社会的実践力の系統表を基に、ステージの段階によって何を目指していくのかについて、校種を越えてさらに議論を重ね、共通理解を図っていく。

【R1 地域創造学に位置付けた体験活動】

小学校	中学校	高等学校
学校探検、植物の栽培、生き物飼育、町探検、郷土芸能、水生生物調査、キャップハンディ体験、野外活動（種山高原）、町のよさや課題を考える活動（町内でのリサーチ、まとめ）等	町の魅力を高めるためのプロジェクト活動（町内でのリサーチ、プラン作成と実践等）、農業体験、職場体験、福祉体験、等	インターンシップ、地域文化選択講座、町の課題を解決するためのプロジェクト活動（町内でのリサーチ、プラン作成と実践）、桜植樹ボランティア等

授業実践例

ア　世田米小学校３年・有住小学校３年
　　地域創造学合同授業　「いいな・すごいな発表会」より

町内でのリサーチを通して見つけることができた世田米地区・有住地区のそれぞれのよさや発表場所に対する「思い」を互いに発信し合うことができた。

イ　住田高校第２・３学年　「地域への貢献を考える」より

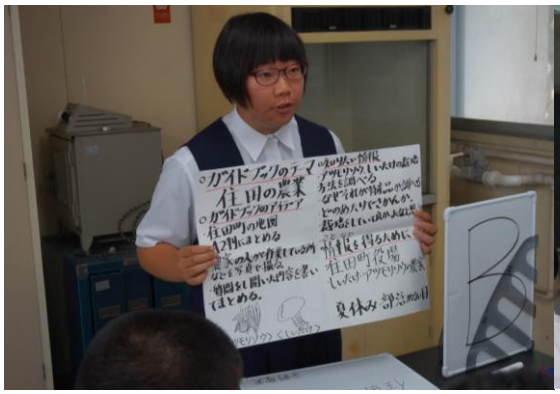
町の課題を解決するためのプロジェクト活動における情報収集として、インタビュー等のフィールドワークを意欲的に行った。

③　言語活動の位置付けについて

探究のプロセスの中で、学んだことを発表する場面では、主体的な活動を通して形成された自己の考えを他者に伝える際、相手意識を持たせるよう留意して指導を行った。その結果、自分が伝えたいことをポイントを押さえながら発表しようとしたり、他者の伝えたいことがより伝わりやすくなるようにアドバイスしたりする様子が見られ、学びが一層深まった。

授業実践例　住田高校第１～３学年　「プロジェクト構想発表会」より

探究活動で学んだこと、自分なりに考えた地域のアピールや地域の課題解決方法の発表会では、主体的に形成した自己の考えを相手意識を持って他者に伝えたり、他者の意見を建設的に受けとめながら、自己の考えを深める場面が多く見られた。



④　主体的な思考を促す適切な支援について

児童生徒の主体的な思考を促すための適切な支援の在り方については、各校校内研究会において、探究のプロセスの在り方や発問の質に関して活発に意見が交わされた。教師が児童生徒をプロセスの通りに主導していくのではなく、児童・生徒が主体的に探究のプロセスを辿っていくために、教師がどのように関与するべきか、研究授業での実践場面を基に議論を深めた。

授業実践例　世田米中学校第１学年　「プロジェクトに取り組んでみて・・・」より

生徒たちが取材活動を基に作成したパンフレットには、地域で活躍する方々の取組やその根底にある願いについての内容が詳細にまとめられており、本時はそのパンフレットを基にした、プロジェクト報告会の発表原稿やポスターを作成する授業。ポスターや発表原稿をどのように工夫すれば、相手に対して発表が伝わりやすいのかについて、生徒たちに主体的に考えさせていた。漠然としている生徒の思考を、教師の問いや対話的活動によって整理していくことが大切であることを確認できた。

⑤　地域創造学に関する異校種の指導との接続について意識した指導の工夫について

各ステージにおける社会的実践力の系統表や年間指導計画を基に実際に授業実践を行ったことで、小学校から高等学校までの１２年間を見通した上で、次のステージを見据えて当該学年では何を重点的に指導していかなければならないのか、という議論が校種を越えて活発に行われた。校種を越え、小・中・高の１２年間でいかに滑らかに児童・生徒の社会的実践力を育成していくのかについては本研究開発の根幹にあたる部分であり、今後も実践結果を基にした議論を重ね、よりよいカリキュラム開発に取り組んでいく。

授業実践例　有住中学校２年・有住小学校６年
地域創造学合同授業　「プロジェクト交流会」より

中学校２年生が小学校６年生に対して自身が取り組んだプロジェクトの発表を行い、小学生の質問などに答える合同授業である。中学生は小学生という年下の相手を意識した発表を

行い、小学生は先輩の発表から自分の数年後のプロジェクトの在り方を思い描くことができた。１２年間を貫く教育課程をさらに生かしていくためには、異校種の教師の連携だけでなく、異校種の児童生徒が学び合う場を設定することも効果的であると考える。

４　教育研究所を母体とした「地域創造学」を柱とする教育課程推進に向けた体制づくりに向けて

（１）具体的な取組：教育研究所各部会での取組

第２年次に引き続き、４つの部会では、各小・中学校長が部長を務め、部会の運営に当たった。

【学校カリキュラム検討部会】

１．部会のねらい

（１）「地域創造学」で育成したい資質・能力と各教科・領域の関連を明らかにした教育課程を編成し、来年度の学校運営計画書の作成に資する。

（２）昨年度、作成した「教科領域との関連検討表」の見直しと改善を行う。

２．今年度の部会研究会の流れ

◇　４月　４日（目）　＜第１回部会＞
　　部会の組織づくり・ねらいの確認・今後の研究推進の方向性の確認等

◇　５月３１日（金）　＜第２回部会＞
　　教科領域関連検討表の様式を検討・経営計画の項目の検討・

◇　７月　８日（月）　＜第３回部会＞
　　各校種で持ち寄った教科領域関連検討表の内容を改善検討

◇１０月　３日（目）　＜第４回部会＞
　　各校種で持ち寄った教科領域関連検討表の内容を改善検討

◇　随時（　メールにて、研究所全体会部会発表内容を相談　）

３．教科関連検討表【第２次試案】の作成

◇「地域創造学」年間指導計画をベースに、関連する教科（領域）の単元を吹き出しで示した。また、教科ベースでの関連検討表（高等学校版のみ）も作成した。

４．成果と課題・今後の研究推進にあたって

（　成　果　）

○「地域創造学」の年間指導計画ベースでの関連検討表を作成することができた。

○「地域創造学 」の指導時期と、各教科（領域）との関連が、【第１次試案】よりも、より鮮明になり解りやすくなった。

○各校で、教務主任と研究主任、学年主任、教科担任との連携が深まり、研究そのものの深化につながった。

（　課　題　）

△時数を減じて「地域創造学」に溶け込ませている「道徳」の内容項目との関連をさらに吟味する必要がある。

△探究活動を重視するならば理系科目（数学等）との関連がもっとあるべきではないか。

△同時に教科ベースでの関連検討表もあったほうがいいのでは、という考えから高等学校版のみ教科ベースの検討表も作成した。

△両小学校・両中学校で、検討表の内容の擦り合わせが必要である。

（　今後の研究推進にあたって　）

☆各校で研究を推進しながら保小・小中・中高それぞれの校種連携をさらに深めていく。

☆第３年次公開の成果・改善点をしっかりと確認し、次年度本公開への意識を持ちながら、４月からの実践を進めていく。

【評価検証部会】

１．研究の目的

地域創造学の評価方法の改善を行う

２．研究の内容

（１）児童生徒の学びの過程を蓄積するポートフォリオやノート等を活用した、多面的な評価の在り方を提案する。

（２）単元において、子どもたち自身の「ふり返り」や「メタ認知」の効果的な場を設定する。

（３）指導者として子どもたちが目標（ルーブリック）を共有しながら、自己の学びを省察し進歩の状況について子どもたちが実感できるようなルーブリックを作成する。

３．研究の推進

評価方法の検証や振り返りの場の設定に当たり、学習指導検証部会と連携して研究を推進する。

第１回　4月　4日（木）　組織の確認　研究内容の確認　活動計画
第２回　4月26日（金）　活動計画　今年度の検証事項について
第３回　6月　5日（水）　ルーブリックについての検討
第４回　7月　8日（月）　ルーブリックについての検討
第５回　7月30日（火）　講義「ルーブリックの在り方と活かし方」
盛岡大学助教　福嶋祐貴
第６回　９月　３日（火）　評価内容・方法についての共有と確認
第７回　１０月　２日（水）　プレ公開に向けての評価について
第８回　１月３０日（木）　研究の振り返り

４．今年度の研究の成果と課題

（成　果）

○ルーブリックについての研修を行い、ルーブリックの定義や活用方法について部会内での共通理解を図ることができた。

○ルーブリックを各校で作成し、研究授業や学校公開授業で活用することができた。

○評価方法の多様性（ルーブリック、チェックリスト、ポートフォリオ、自己評価等）について理解を深めることができた。

（課　題）

△ルーブリックの共通理解と作成に時間を要してしまい、他の評価についてはほとんど検討できなかった。

△今回作成したのが「間接提示のルーブリック」であったが、今後の方向性についての確認が必要である。

△ルーブリックについて部会内での理解から、全体への周知が不十分であった。

△作成したルーブリックをどの場面でどう活用し、生徒の学びをとらえるかを示すには至らなかった。

５．来年度の研究の方向性

（１）ルーブリックを含めた評価について、全体で共有する場を設定し、どの場面でどう活用し、生徒の学びをどのようにとらえるかを周知していく。

（２）地域創造学の特性から、作成するルーブリックを「間接提示のルーブリック」として推進していく。

（３）子供たちの活動の様子をより多面的に見取るために、「学びのあしあと」（住田町におけるポートフォリオ）の具体的な活用方法について研究していく。

【学習指導検証部会】

１．研究の目的

（１）新教科の指導方法を多面的・多角的視点から工夫・改善する。

（２）社会的実践力を育成するために効果的な指導計画を立案する。

２．研究内容

（１）児童生徒の探究的な学習活動の充実に向けた、探究のプロセスに基づく多様な授業展開の在り方を探る。

ア　児童生徒の主体的な思考を促す指導者の適切な支援の在り方を探る。

イ　短期間ではなく、長期間にわたって子どもたちの内面に残り、活用される力を定着させる指導を工夫する。

ウ　地域の学習材を意図的・効果的に取り入れた単元計画を作成する。

（２）単元配列表（試案）及び年間指導計画（試案）に基づく授業実践及び年間指導計画・単元計画の改善を行う。

ア　ステージ内及びステージ間での学習内容の系統性や反復性、学習方法の積み上げに留意した年間指導計画の単元配列になるよう改善を図る。

イ　共通単元の検討を通して、校種間での連携を意識した年間指導計画になるよう改善を図る。

ウ　児童生徒の主体的な思考を促し、地域のひと・もの・ことの活用や連携をより促進した単元計画を作成する。

３．研究の実際

（１）授業改善に関わって

今年度は、小学校はそれぞれ三つの授業提案、中学校はそれぞれ二つの授業提案を行い、各学校から先生方が集まって授業を見合うようにした。また、第１ステージ、第２ステージ、第３ステージ、第４ステージそれぞれ悉皆で集まって授業を見合うことも行った。住田高校でも２度の授業公開を行い、小・中から先生方に集まっていただき、授業を見ることができるようにした。

（２）単元計画の改善に関わって

各学年及び各ステージにおいて、以下の観点から単元計画の見直しを図ってきた。

・単元名については、 単元の内容を表すものとして妥当かどうか。

・単元の目標については、４つの資質・能力の育成につながる目標として妥当かどうか。

・評価規準については、単元の目標の達成度を評価する評価規準として妥当かどうか。

・単元の指導・評価計画については、単元の目標を達成するための学習活動や時間配分として妥当かどうか。

・年間の単元計画の構成については、現行の単元計画の構成が、その学年の単元の内容として妥当かどうか。

単元計画の改善においては、今年度の実践をもとに単元の内容を見直すとともに、単元計画の様式等も項目の並びや評価について変更した。部分改訂した各学年の単元計画をまとめ、今年度中に各学校に配布する予定である。

４．成果と課題

（１）授業改善に関わって

ア　成　果

・各校において、これまでの研究の経過や児童生徒の実態を踏まえて、社会的実践力を育

成するための方途を考え、地域創造学における授業改善を進めることができた。
・校内研究会の際には、他校からの授業参観及び授業研究会の参加をするようにし、各校の研究及び実践についての交流を図ることができた。

イ　課　題

・各校の研究内容をすり合わせながら、社会的実践力を育むために有効な指導の在り方について考えていく必要がある。
・町の研究主題にある「なめらかな接続」について、各学校間やステージ間の接続を意識しながら、研究の方途について考えていく必要がある。

（２）単元計画の改善に関わって

ア　成　果

・単元計画の改善について、見直しの視点を明確にしながら単元計画の改訂を行うことができた。
・単元計画の表記について、各学年や各ステージで様式をそろえるとともに、単元の構造が分かるようにするなど、活用しやすい単元計画を作成することができた。

イ　課　題

・より学年間やステージ間の発達段階を意識しながら、１２年間で社会的実践力を確かに育むことのできる単元計画を作成していく必要がある。
・児童生徒の活動への思いや問題意識を大切にしたり、体験的な活動の充実を図ったりするなどして、探究の深まりを視点とした単元計画の改善を図る必要がある。

５．研究の方向性

（１）授業改善に関わって

・各学校において、今年度の研究及び実践を振り返り、その成果と課題を明らかにしながら研究をまとめる。
・各学校において、今年度までの研究を基盤としながら、各学校の児童生徒の実態に基づき、目指す児童生徒像を明確にして研究主題を設定し、令和２年度の研究を進める。
・児童生徒の探究的な学習活動の充実に向けた、探究のプロセスに基づく多様な授業展開の在り方を探り、地域創造学の指導の在り方について、多面的・多角的な視点から考えていく。

（２）単元計画の改善に関わって

・令和２年度は、研究開発の研究指定の最終年度となる。よって、令和２年度に使用する単元計画は、今年度実践したことを踏まえて、現行の単元計画に改善を加え、部分改訂して作成する。
・令和３年度からは、次の研究開発の研究のサイクルが始まる。よって、令和３年度から使用する単元計画は、１回目のサイクルの４年間の研究及び実践を踏まえて、それまでの単元計画を大改訂して作成する。大改訂の際は、現行の単元計画において、社会的実践力の育成のために有効なものを生かして改訂を行うようにする。

【就学前教育研究部会】

１．目的

生涯学習の基礎としての就学前教育における保育・教育の在り方、保育園と小学校の連携について研究を行う。

２．研究の内容

（１）「すみた幼児教育（保育）プラン」に沿った研究を行うとともに、本プランの見直し案

を作成する。
（２）小学校における「スタートカリキュラム」（試案）を作成する。
（３）「地域創造学」における非認知能力と認知能力のバランスのよい育成を目指すために、幼児教育と小学校教育の円滑な接続が図られるよう、小学校教諭の保育体験、保育士の授業参観などの相互交流を通して保育園と小学校の連携の進め方を研究する。

３．今年度の取組

（１）「すみた幼児教育（保育）プラン」の見直し
（２）小学校における「スタートカリキュラム」（試案）の作成
（３）保育園と小学校の連携
（４）小学校と保育園の相互交流

４．成果と課題、今後の研究推進にあたって

＜成　果＞
○改訂された学習指導要領、保育指針に即して「すみた幼児教育（保育）プラン」の見直しを図り、新しいプランを完成させることができた。
○「住田町接続期カリキュラム」に即して、「スタートカリキュラム」の試案を作成することができた。
○「地域創造学」で育成すべき資質・能力と保育で目指す「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の関連性について、保育園・小学校の実践を通して検証することができた。
○保育園・小学校と校種の違いを超えて、連携して研究を深めることができた。
○改訂された学習指導要領、保育指針（特にも「幼児の終わりまでに育ってほしい１０の姿」）について、理解を深めることができた。
○各回ごとに活動した内容をまとめ、次回の内容や作業分担を確認しながら進め、効率的に部会運営を行うことができた。

＜課　題＞
△「すみた幼児教育（保育）プラン」を来年度から実践していく中で、より活用しやすいものとなるよう、加除修正をしていく必要がある。
△「スタートカリキュラム」については、来年度新しい教科書の策定に関わり、単元配列の見直しが必要である。
△事例として取り上げた活動のみではなく、日常の保育や教育活動が滑らかにつながるよう、さらに保小連携を深めていく必要がある。
△研究所の全体会前に、発表に関しての部会を設定することができず、各園・各校で対応していただき、共通理解する場をもてなかった。来年度は、全体会発表の前に部会を開催できるように見通しをもった計画を立てていきたい。

＜今後の研究推進にあたって＞
☆今年度見直した「すみた幼児教育（保育）プラン」の実際の活用を図る。
☆試案で作成した「スタートカリキュラム」については、単元配列の見直し・活用・改善を図り、学校の実態に即したもの改良する。
☆研究の継続（保小連携）
・「地域創造学」における社会的実践力を構成する資質・能力と「幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿」との関連や発展について実践を通して研究を深める。
・園児と小学生、保育士と教員の相互交流のさらなる充実を図る。

（２）具体的な取組：各学校での取組（研究の実際及び成果と課題の詳細等は別冊資料に掲載）

「地域創造学」を中核に据えた教育課程の実践を開始した本年度は、各校の社会的実践力を育む

ための研究推進がより一層加速した。

【世田米小学校】

Ⅰ　研究主題

地域に愛着をもち、進んで地域に関わる子どもの育成
～主体的・対話的・探究的な地域創造学の学びを通して～

Ⅱ　研究目標

地域に愛着をもち、進んで地域に関わる子どもを育成していくために、どのような単元構想や学習指導をしていけばよいか、主体的・対話的・探究的な学びを視点とした地域創造学の授業実践やその分析、授業交流等を通して明らかにする。

Ⅲ　研究の仮説

地域創造学の教育過程において、地域素材を題材とした学習活動を通して次の手立てを講ずれば、地域に愛着をもち、進んで地域に関わる児童が育つであろう。

・「見通し」「振り返り」の工夫
・学びを深める対話の工夫
・探究活動における言語活動の工夫

Ⅳ　研究内容

1　地域創造学の単元構成
2　地域創造学の指導方法

Ⅴ　研究方法

1　授業実践を通した仮説の検証
2　他校授業研究会への参加

Ⅵ　成果と課題

1　成果

（1）体験的な活動を生かした導入や資料の提示の工夫により、子どもたちが活動への思いや問題意識をもって探究活動に取り組む様子が見られるようになってきている。
（2）友達や地域の人との対話によって、友達の考えから新たな気づきを得たり、地域の人の思いに気づいたりする様子が見られるようになってきている。
（3）地域の事象について考える学習活動によって、今まで日常的に接してきたものの意味や価値に改めて気づく様子が見られるようになってきている。

2　課題

（1）子どもたちがより主体性をもって探究活動に取り組んでいくことができるように、子どもたちの「気づき」や「問い」を生かした課題意識のもたせ方をさらに工夫する。
（2）学習課題や探究活動の目的に沿って、意図を明確にして、学級全体やグループ、ペアなどの学習形態を決めていかなければならない。
（3）言語活動の工夫については、各ステージにおいて発達段階を踏まえてどのような言語活動を重点にしていくのか明確にしていきたい。

【有住小学校】

1　研究主題

自ら思いをもち，主体的にかかわる児童の育成
～伝え合い，学び合う学習活動を通して～

２　研究の目標

自ら思いをもち、主体的にかかわる児童を育成していくために、どのような学習指導をしていけばよいか、主に地域創造学の授業実践授業交流を通して明らかにする。

３　研究の仮説

地域創造学の教育課程において、伝え合い、学び合う学習を意識した学習活動の中で、次の手立てを講ずれば、自ら思いをもち、主体的にかかわる児童が育つであろう。

４　研究の内容

（１）児童が思いをもって学習活動に取り組むための工夫

・自らを主体として学習課題や内容を捉えるための導入の工夫
・振り返りの視点や付けたい力の明確化
・単元の流れや学習のゴールの明確化・可視化
・評価のあり方の検討

（２）児童がかかわりを意識しながら、対話的な学びを深める授業づくり

・学年に応じた言語活動や表現方法の積み上げ
・相手意識をもったコミュニケーションの習得

５　研究の方法

（１）授業実践を通した仮説の検証
（２）他校授業研究会への参加
（３）創造に関わっての児童アンケート

６　来年度の研究の方向性について（現職教育を含め）

・今年度の研究を継続し、深める方向性がよいと思う。
「見通し・振り返り」を意識した授業、評価方法について、「伝え合い、学び合う」学習活動の具体的な手立て・・等。
・年間指導計画の内容を吟味し、一つ一つの単元を大切に指導していくこと。学校公開に向けて計画的に準備を進めていくことが大切だと思う。
・今年度の流れを受けて児童の伝えあう・振り返る力を育てていく必要があると考える。
・国語や特活の話し方・聞き方を加味した、学年に応じた指導を明確にしたほうがいいかなとも思う。（指導要領解説「地域創造学編」を有効に活用し、今年できなかった有住小の「話し方と聞き方」の指標を作りたい。）
・現職教育としては、来年度から学習指導要領が完全実施となるので、主に英語や道徳の指導方法や評価等の研修を行いたい。

【世田米中学校】

１　研究主題

社会的実践力を身に付けた生徒の育成
～主体的・協働的な学び方を身に付ける授業づくりをとおして～

２　研究仮説

研究仮説：主体的・協働的な学び方を身に付ける授業づくりに取り組めば、社会的実践力を身に付けた生徒を育てることができるだろう。

（１）地域創造学の実践にあたり

地域創造学の実践を通して、社会的実践力を身に付けた生徒の育成を目指すために、以下三点を配慮したい。

今年度、地域創造学の実践で特に配慮したいこと

①各学年で、「地域の魅力を取り扱い、その魅力の発信に取り組む活動（以降、「プロジェクト」）に重点を置いた授業実践に取り組む。

②「プロジェクト」では生徒の興味・関心に寄り添った活動が展開されるように、支援の手立てを講じる。

③生徒同士や生徒と教員による対話の他、生徒と地域住民による対話が促進されるように、手立てを講じる。

（２）次期学習指導要領を見据えた実践にあたり

次期学習指導要領の見据えた実践を通して、社会的実践力を身に付けた生徒の育成を目指すために、以下二点を配慮したい。

３　次年度に向けて

次年度、重点を置きたい項目は、「地域創造学を中核に据えた授業実践」、「特別な教科道徳」の実践や評価をするための資料の蓄積」、「学力向上に向けた組織的な取り組み」の３点である。

次年度、研究開発学校の取り組みは、４年次研究を迎え本公開となる。したがって、「地域創造学を中核に据えた授業実践」に取り組み、求められている「社会的実践力の育成を図ることが可能なカリキュラム」や「異校種との連携を意識したカリキュラム」の実現を目指したい。

「特別な教科　道徳」は、本格実施２年目になる。学校活動・学校行事と教材の配列を工夫し、体験を伴いながら価値項目について学びを深めることができるように指導を工夫したい。また、年度当初と年度末の変容が教員と生徒とで自覚できるように評価も工夫したい。

諸調査の結果や、岩手県教育委員会の方針を踏まえると、学力向上を目指し、授業や家庭学習の改善に取り組む必要がある。生徒自身が学びの目的を自覚し、そこに向かったよりよい学習習慣が身につくように、指導の在り方を工夫したい。

【有住中学校】

Ⅰ　研究主題

生徒の社会的な実践力を伸ばす授業の在り方の研究
～「協同的な学び」の実践を通して～

Ⅱ　研究の仮説

授業で課題（目標）を明確に示し、その解決（達成）のための学びを協同的に進めることで、社会的な実践力が身につくだろう。さらに、教職員が協働的に取り組むことで、研究はさらに充実するだろう。

Ⅲ　研究の内容と方法

（１）本校生徒の実態把握

①　授業や行事の後のアンケートなどによるふりかえりの実施と分析

② 新入生学調、全国学調、県学調の結果分析
③ Ｑ－Ｕ、心とからだの健康観察の結果分析
④ 健康観察や行動観察などによる日常的で継続的な実態把握

（２）協同的な学びのあり方の実践と効果の検証
① 実態に応じた、授業での実践と交流
② 校内研究会による指導方法の学習や検証・検討

（３）社会的実践力の育成とその支援方法の考察
① テストや表現による生徒の変容の評価
② ふりかえりやアンケートによる生徒のメタ認知の評価
③ 生徒の変容やメタ認知の評価をもとにした、グループでの学習活動の評価

Ⅳ 考察と今後の課題

（１）社会的な実践力の育成と協同的な学びについて
- 今年度は、各教科においても社会的な実践力の育成に取り組んだ。地域創造学に限定せず、これからの時代を生き抜く上で必要な力を多角的・多面的に身につけさせたい。
- 地域学習は、各資質・能力の獲得や伸長に有効と考える。また、その学習を通して、外部との連絡の取り方やメディアの活用の仕方、訪問のマナーなど多くの事を学ぶことができる。
- 中２の地域学習で、調べたことを提言にまとめ発信することを目指したが、提言までたどり着いた生徒は少なかった。単元計画を見直す必要がある。
- 中３の地域学習で、行動するプロジェクトに取り組むことが遅くなってしまった。高校生が地域学習のなかで作った歌を活用し、「住田のＰＲ動画」を作るプロジェクトは完結させられなかった。担当の生徒は、住田高校入学後に引き続きプロジェクトに取り組み、完成させたい思いを持っている。地域貢献を目指した「地域の方との交流会」を企画したプロジェクトは、手芸、調理、木工の３コースで行われた。冬休み中の交流会となったため、小学生に広く参加を募ることはできなかった。地域の中から講師の先生を見つけ出すのに苦労した。
- 小中高の滑らかな接続を目指し、異校種間の連携を進めた。来年度は、年間計画を整理し、より計画的に進めていきたい。また、住田高校の「地域文化選択講座」に代わる連携を考えていく必要がある。
- 第４年次公開に向けて、地域創造学やルーブリック評価についての共通理解を全体でする必要がある。

【岩手県立住田高等学校】

Ⅰ 研究推進において大切にしたこと（研究主題）
・生徒の興味関心を中心に
・アクション重視
・発表を通し自他ともに成長

Ⅱ 研究仮説

第４ステージは、地域を知るとともに地域の方々から直接情報提供や指導をいただき、自分なりに考察したうえで、ガイドブックを作成する。それを展示やSNS等を通じて情報発信し、町内外の方々に住田町の魅力がどのように伝わったかを検証する。

第５ステージは、生徒たちの興味関心をもとに、地域の現状を理解したうえで、「住田に関わる人をハッピーにするためのプロジェクト」を考え、アクションを起こす。得られたデータをもとにその結果を考察する。

両ステージともに、１年間のスケジュールの中でフィールド調査を実施する過程において、地域の多様な方々と関わる機会を持つことや数回にわたる実践発表会を通じて、生徒個々に自主性を育み、主体的に物事を考える力を身につけさせることができるであろう。

Ⅲ　研究の内容と方法（月ごとの生徒の活動のみ記載：詳細は別冊資料）

４月　「地域創造学」オリエンテーション
５月　研究テーマの決定
６月　調査計画の構想①
７月　調査計画の構想②
８月　フィールド調査①
９月　フィールド調査②
１０月　フィールド調査まとめ①　アクション計画①
１１月　フィールド調査まとめ②　アクション計画②
１２月　アクション①
１月　アクション②
２月「地域創造学」１年間の振り返り及び次年度の調査研究計画考察（１・２年生）

Ⅳ　研究のまとめと今後の課題

〇まとめ

１　第４ステージ

ガイドブック作成にあたり、外部専門家との協働

住田町役場職員はじめ、町内の多くの方々からの協力を得て、フィールドワーク調査を実施することができた。また、電話によるアポイントの取り方を実践できた。

２　第５ステージ

気仙地区の食材を使った料理やスイーツの考案、また自然や多様な形式での住田の魅力発信をするアイディアが出された。いずれも、現地調査や試作品を作成する等アクションを起こし、他者への提供を行うことで検証することができた。

Eg）メイプルシロップを使った料理研究　大学及び企業との協働研究

⇒次年度は、後輩が研究活動を継承する。

「住田の歌」プロジェクト

町内小中学校の児童生徒へのアンケート調査依頼協力を実施

☆今後の課題

１　研究テーマの設定及び研究スケジュール

特に第４ステージは、ガイダンス・オリエンテーションを充実する。生徒にとって自己の生き方を十分考えたうえで、生徒自身が深めたい・やってみたいという取り組みのテーマにする。

２　教員の生徒への関わり

研究は、生徒自身が進めていく中で見いだすような取り組みにする。従って教員は良い意味での伴走者的役割を演じる。なお、第４・第５ステージとも担当学年の先生方で対応していくこととする。

３　フィールドワーク調査

住田町に限定せず、気仙管内に手を広げて良い。他地域（場合によっては世界）との比較もしながら地域をとらえ、生徒自身の生き方在り方を考えていくものとする。

４　中高連携の在り方

滑らかな接続を考えると第４ステージにおいては、世田米中・有住中の出身者をグループのリーダー的役割に据えながら、研究活動を進めていくことも有効ではないか。

５　評価に関する取組について

（１）　研究開発学校推進委員会と運営指導委員会の開催について

研究所運営委員会として年に２回開催している会議において、各小・中学校長、県立住田高等学校、各保育園長、副校長会代表、教務主任代表と研究開発の内容や方向性について検討を行った。また、校長・園長会議の開催にあわせて研究開発学校推進委員会を開催し、研究開発についての検討、協議を行ってきた。

また、１・２年次に引き続き、８名の外部有識者による運営指導委員会を組織し、研究について専門的見地から直接ご指導をいただいた。

【運営指導委員会】

組織

氏　　名	所　　属	職　　名	備考（専門分野等）
田代　高章	岩手大学教育学部	教　授	教育方法学
山本　奬	岩手大学教育学部	教　授	学校臨床心理学
後藤　顕一	東洋大学食環境科学部	教　授	教育課程
毛内　嘉威	秋田公立美術大学	副学長	道徳教育、教育課程
佃　　拓生	岩手県教育委員会学校教育課	主任指導主事	
佐々木　淳	岩手県教育委員会学校教育課	指導主事	
杉田　哲朗	岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所	主任指導主事	
向口　千絵子	岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所	指導主事	

開催記録

	開催期日　場所	内　容
第１回	令和元年７月３１日 住田町役場	【指導助言者】 岩手大学教育学部　教　授　田代　高章 秋田公立大学　副学長　毛内　嘉威 岩手県教育委員会学校教育課　主任指導主事　佃　拓生 岩手県教育委員会学校教育課　指導主事　佐々木　淳 岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所　主任指導主事　杉田　哲朗 岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所　指導主事　向口　千絵子 ・研究の方向性や計画等についての指導助言 ・令和元年度の７月までの研究状況について
第２回	令和元年１１月２９日 住田町役場	【指導助言者】 岩手大学教育学部　教　授　田代　高章 岩手大学教育学部　教　授　山本　奬 岩手県教育委員会学校教育課　主任指導主事　佃　拓生 岩手県教育委員会学校教育課　指導主事　佐々木　淳 岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所　主任指導主事　杉田　哲朗 指導主事　向口　千絵子 ・第３年次学校公開研究会での指導助言 ・研究の方向性についての指導助言
第３回	令和２年２月１０日 住田町役場	【指導助言者】 岩手大学教育学部　教　授　山本　奬 岩手県教育委員会学校教育課　主任指導主事　佃　拓生 岩手県教育委員会沿岸南部教育事務所　指導主事　向口　千絵子

		・研究のまとめに対する評価と次年度計画についての指導助言、令和２年度実施計画書（修正版）について

（２）教育研究所全体会の開催について

町の教育研究所では、町内小・中学校教諭、県立高等学校教諭、町内保育士を研究員として委嘱し、年４回の全体会開催を通じて各校の取組の共有を図っている。

【今年度の研究所全体会の開催】

	開催日	出席人数 小中高教員 保育士	会場	内容
第１回	4/4	60人	住田町役場 町民ホール	・今年度計画確認、部会開催
第２回	7/30	48人	住田町役場 町内各施設等	・部会開催 ・森林環境学習、民俗資料館、農業、まちづくりの４コースに分かれて地域資源について教職員が学ぶ研修会
第３回	1/9	52人	住田町役場 町民ホール	・部会発表（今年度の成果物について） ・次年度の年間指導計画検討
第４回	2/10	66人	住田町役場 町民ホール	・部会発表（今年度の成果と課題） ・校内研究のまとめ発表

【４月第１回全体会の様子】

自己紹介も兼ねて情報交換を行う保・小・中・高の教職員

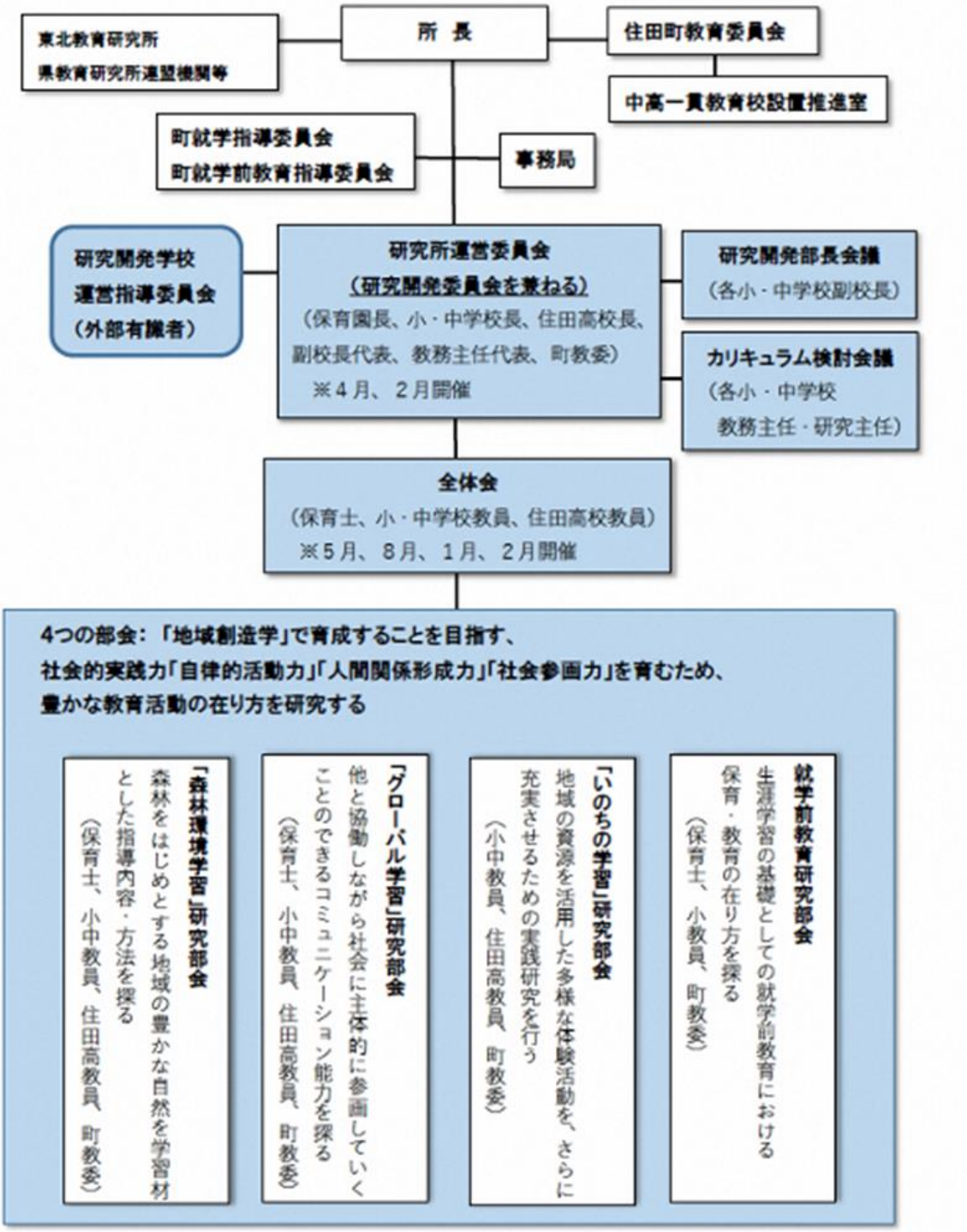
【７月第２回全体会（教職員研修会）の様子】

森の案内人の説明を聞きながら、種山について学ぶ教職員

（３）教育研究所の組織について

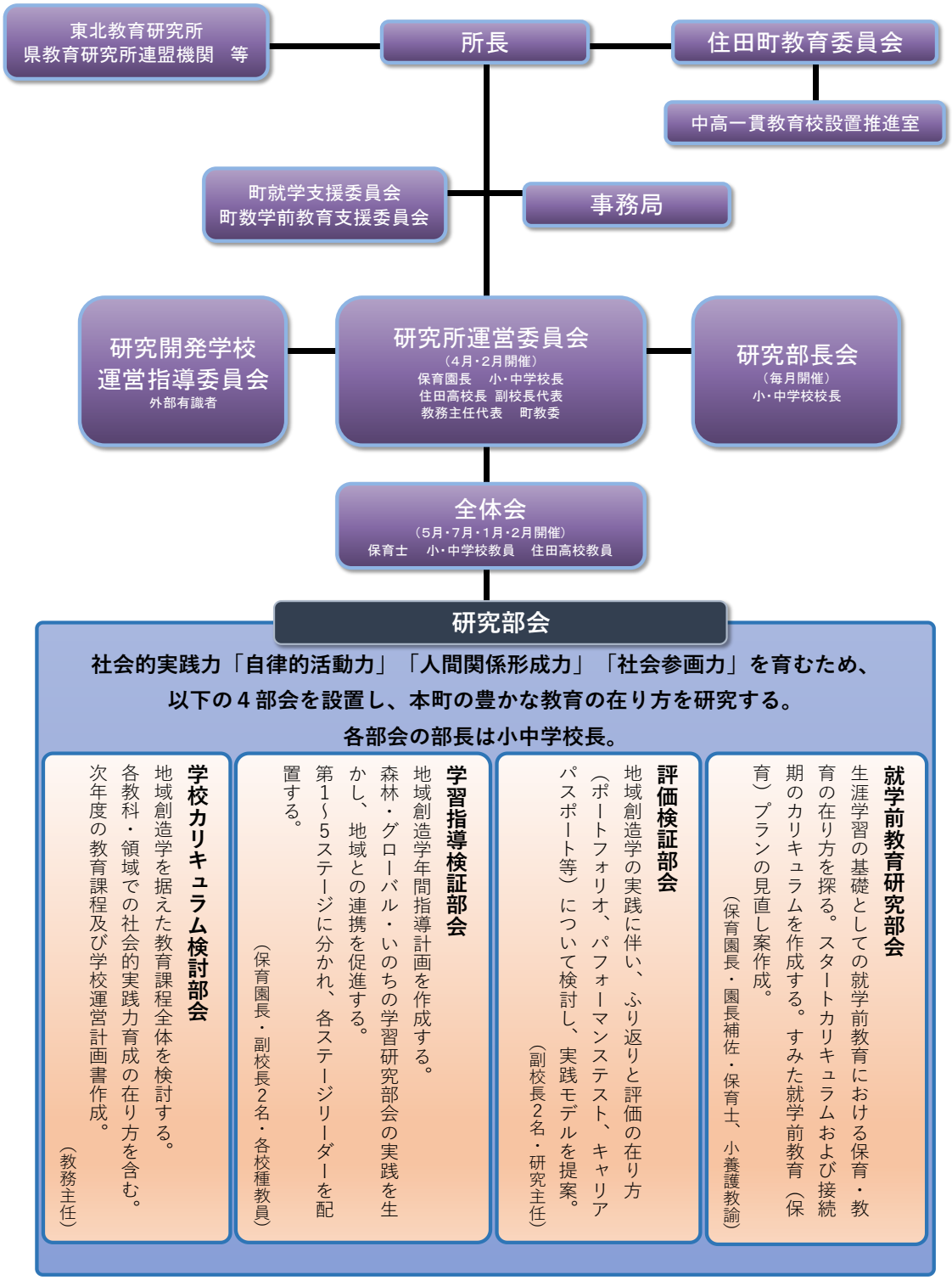
研究１年次、各部会での取組をとおして異校種の教員が交流し互いの実践について相互理解を図ることと、各学校の校内研究において、目指す資質・能力の検討と実際の教育課程実施に向けての準備を行うことを通じ、町の教育研究所体制について改編の必要性が議論されるようになった【表 5－1】。

【表 5－1】Ｈ２９年度研究所組織図



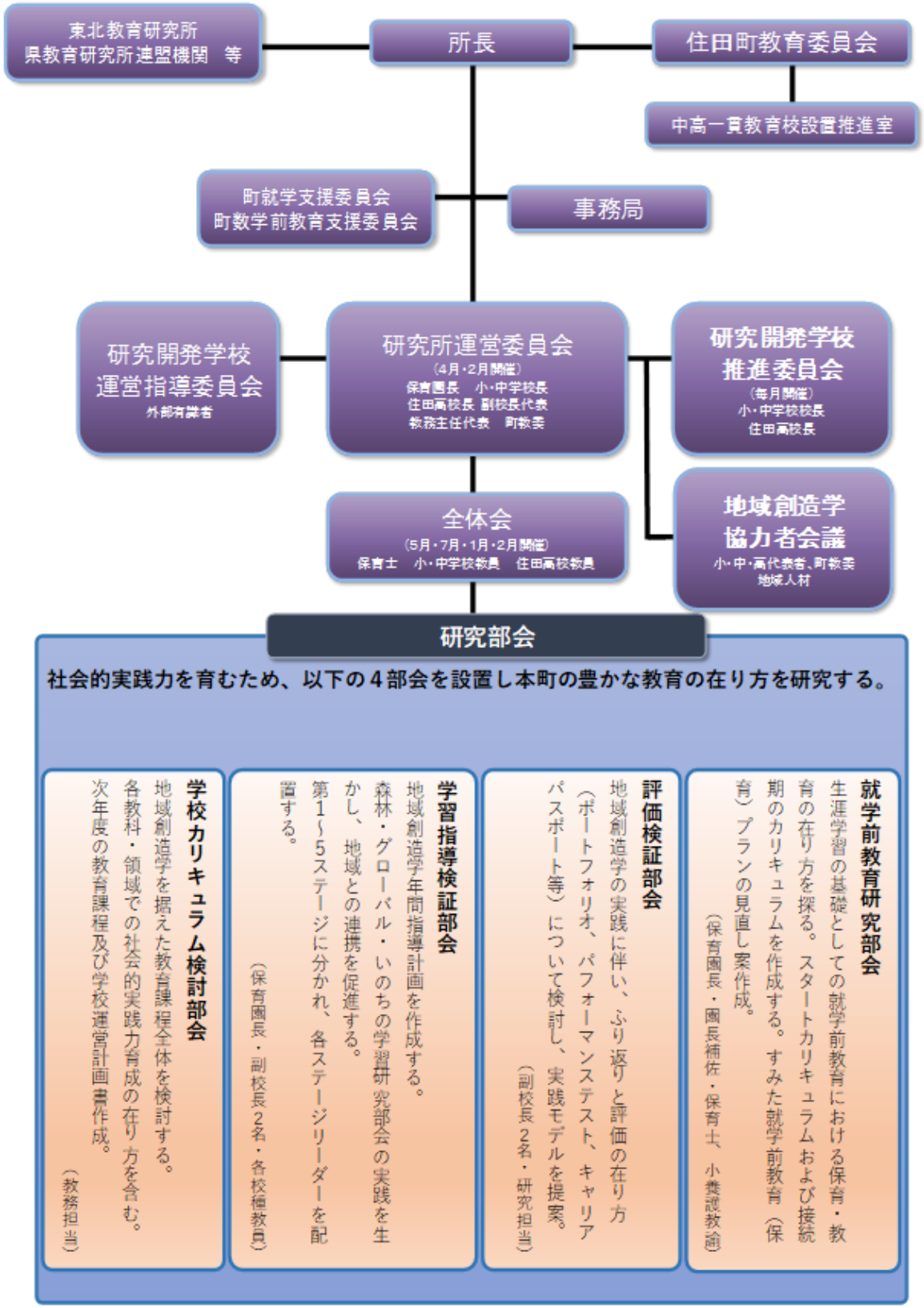
３０年度から地域創造学を据えた教育課程を実施しながら、その成果や課題を継続的に検証していくために、研究所の組織を大幅に改編し、取り組んでいくこととした【表 5－2】。

【表 5－2】Ｈ３０年度研究所組織図



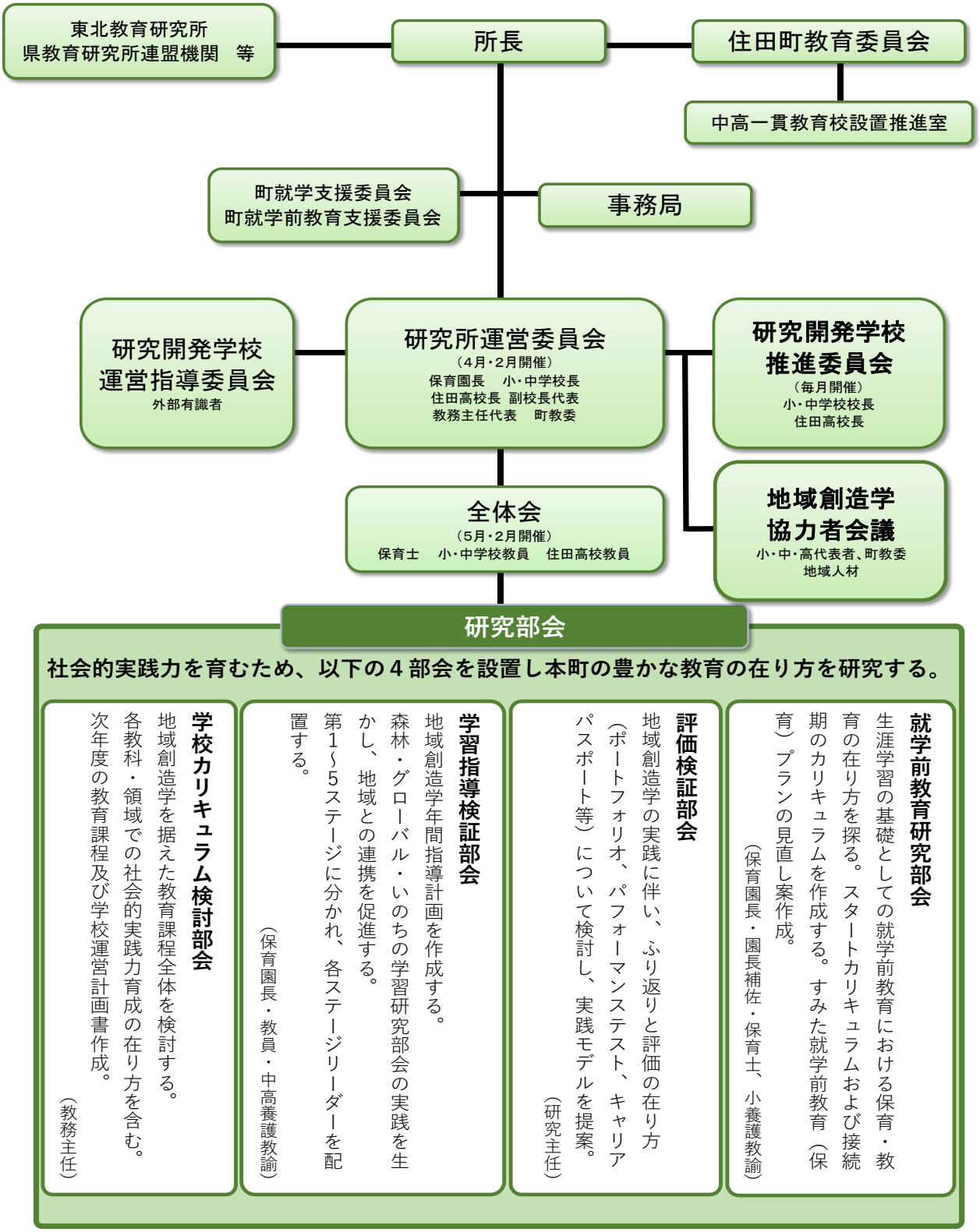
３年次は各校の代表者、町教育委員会と、地域創造学の学びに協力をいただく地域の方々とで、地域創造学の構想や学習予定、協力を要請したいこと、地域の方からの助言や意見等を直接お聞きし協議する場として、新規に地域創造学協力者会議を開催した【表 5－3】。

【表 5－3】令和元年度研究所組織図



４年次は「地域創造学協力者会議」を３年次に引き続き開催し、地域全体で児童生徒の社会的実践力を育成していく体制をさらに強化していく。また、１月と２月に行っていた全体会の内容を集約して２月に１回で行うこととし、夏休みに行っていた全体会は、地域資源を教員が学ぶための「教職員研修会」に名称を変更することとした。【表 5－4】。

【表 5－4】Ｒ２年度研究所組織図案



６　研究開発の結果及びその分析

（１）実施による効果

ア　児童生徒への効果

今年度は、昨年度に試案として作成した社会的実践力の系統表、年間指導計画、地域創造学学習指導要領解説に基づいて「地域創造学」を実施し、地域を題材とする学びが展開された。地域のよさや課題を探究した第３ステージから第５ステージまでの小・中・高校生からは、共通して「もっと地域のことを調べたい」、「自分の課題を解決するためにもっとこんな資料が欲しい」という声があったことが報告されている。調査活動を行ううちに、調査計画段階では想定していなかった新たな疑問が生まれてきたことがうかがえる。児童・生徒にとって身近な地域資源を題材に、主体的に課題設定や情報収集などの探究のプロセスを踏んでいくことで、探究意欲が高まってきたことの表れであると考える。

第４ステージから第５ステージの中学生や高校生は、地域の課題解決を探究的に進めるプロジェクト学習に取り組んだが、地域のよさや課題を自分たちなりに捉えた上で、自分たちに現実的にできることを考え、実践した生徒も多くみられた。以下は実践例である。

①　世田米中学校「住田の食材を生かして給食献立をつくろう」

世田米中学校３年生２名は、住田の食材を生かして給食献立をつくるプロジェクトに取り組んだ。住田町では様々な食材生産が行われているが、自分たちと同世代の人たちはそのことになかなか気づくことができない。だからこそ、その食材を生かした献立づくりを通して、同世代にそのことに気づいてもらおうというというねらいがあった。生徒たちは住田町でつくられている食材調べから情報収集をスタートし、その食材を使った献立や料理の調理方法【資料６－１】までを考え、町の給食センター栄養教諭にオリジナル給食として実際に学校で提供することができないかを提案した。栄養教諭との何度もの協議の結果、生徒たちが考えた献立が１２月の学校給食の献立【資料６－１】として採用されることが決定した。住田で食材がとれる時期的な関係から、１２月の献立に住田の食材を使用することはできなかったが、来年度、住田の食材を使用できる時期に、同じメニューを提供していただくように要望することを計画している。

【資料 6-1】調理方法を探究する生徒（左）と学校給食に採用された献立（右）

②　住田高校「住田町の歌を作ろう～大好きな住田のために～」

住田高校２年生７名は、オリジナルの住田町の歌を作るプロジェクトに取り組んだ。住田高校では地域創造学を通して全校で住田をハッピーにするということをねらいとした「スミハピプロジェクト」に取り組んでいる。これらの生徒たちは、人口減少や高齢化が進む住田を活気

づけ、今よりも明るい住田にしたいという願いのもとに、住田町のいいところがたくさん詰まった歌を作り、住田を活気づけようと考えた。まずは、自分たちの主観だけではなく、客観的に住田のよいところをとらえ直すために、「住田のよいところ」に関わるアンケートを校内や町内の小・中学校の生徒たちを対象に行った。そして、そのアンケートの結果を基にして、歌詞を作り上げた。以下【表６－１】は現在出来上がっている「住田の歌」１番の歌詞である。

【表６－１】住田高校「住田町の歌を作ろう」プロジェクト：「住田の歌」の１番の歌詞

ここは日本で一番大きな県	一山超えると小さな町が
そこには君の知らない輝きが	かわいい声の動物や
太陽のような笑顔	耳をすますと森や風がささやいている
大きく流れる気仙川	そこに流れるあゆの群れ
空を泳ぐいわし雲	Oh　Oh　すみた　Oh すみた

生徒たちは、このあと２番まで歌詞を作成し、曲に関しては住田高校の音楽科の教員とも協力しながら完成させていくことを計画した。今年１月には曲が完成し、気仙地区の４つの高校の生徒が集まって行われた課題研究発表会でこのプロジェクトの内容について発表を行い、発表後には住田高校２学年全員で「住田の歌」の１番の合唱を披露した【資料６－２】。

【資料６－２】プロジェクトについて発表する生徒たち（左）と合唱を披露する２年生

今後の活動としては、歌に踊りや手話もつけた上で、まずは保育園の園児たちと交流しながら一緒に歌うことを計画している。その後は小・中学校の生徒にも発表を行い、動画化して町に浸透させることも考えている。さらには歌に合わせた体操なども考えながら、町の高齢者施設を訪問し、高齢者と一緒に体操をすることで元気を与えようという構想も視野に入れている。これからの未来における町の各種イベントで流してもらうことも考えており、住田を活気づけていくプロジェクトに意欲的に取り組んでいる実践であるといえる。

これら二つの実践例からは、生徒たちが地域のよさや地域の抱える課題を理解した上で、自分たちが興味・関心を持った題材（食材・歌）をテーマにして、自分たちに現実的にできることは何かについて突き詰めて考え、テーマを設定し、プロジェクトを主体的に実践したことがわかる。生徒たちはテーマ設定の段階から献立が採用されることや自分たちがつくった歌が形になることを確信していたわけではなかったが、学びのプロセスを往還しながら、自分たちにできることを明確にしてプロジェクトを進めていった成果が結果となって表れた例であるといえる。また、この高校生が作成した「住田の歌」を、有住中学校の生徒たちが自分たちの地域創造学のプロジェクトで作成する「住田のよさを伝える動画」のバックミュージックで使用す

ることも決定しており、まさに異校種の生徒たちが主体的に連携して、住田町の課題解決に取り組む姿も見られるようになってきている。

その他にも、各校種における探究活動で学んだことを発表会では、主体的に形成した自己の考えを相手意識を持って他者に伝える場面や、他者の意見を建設的に受けとめながら、自己の考えを深める場面が多く見られた。また、他者の発表に対して多面的・客観的な視点から意見を述べるだけでなく、自分の思考を内省的に吟味する場面も見られ、批判的思考力の高まりも感じられた。

このように、実施による児童生徒への効果は様々挙げられるが、今年度から児童生徒の学習の変容や達成感を捉えるために実施している教育達成測定についても今後分析を進め、児童生徒の社会的実践力を育成していくうえで、より効果的な単元構成や指導方法、評価の在り方につなげていきたい。

イ　教師への効果

昨年度に試案として作成した社会的実践力の系統表や年間指導計画、学習指導要領解説に基づいて授業実践を行っているが、授業実践を行う過程において、児童・生徒の実態に基き、指導計画に修正を加えて実践している例が多く見られる。例を挙げれば、最初の指導計画の段階では、調査活動を１回設けていたが、予想以上の生徒の探究意欲の高まりから、最終的には３回まで調査活動を増やした例も見られた。これは児童生徒の探究意欲に刺激を受けた教員が、児童生徒に社会的実践力を育成していくための指導方法や指導内容に工夫を加えたことの表れであると捉えられる。

また、昨年度に引き続き、小・中・高５校で年間１４回の研究授業公開を開催したが、同校種だけでなく、異校種の研究会に多くの教員が参加した。研究会においては、保育園年長児を含む１３年間を貫く社会的実践力の系統表に基づいた年間指導計画の在り方や効果的な指導方法、評価の在り方について活発に議論を交わした。各校種での実践結果を基に、発達段階に応じて児童生徒の主体性をより意識した指導を行っていくこと、内容に関しても地域を知り理解を深める段階から地域の課題解決を考え、実行・提言していくような枠組みを考えていくべきなのではないかという意見等が現場の教員から主体的に出されたことは大きな成果であると言える。

また、社会的実践力の系統表に基づいて、各ステージでどのような力をどこまで育成して次のステージへつなげていくべきなのかなど、校種を越えたマクロの視点で指導計画や指導内容について考えられるようになってきたことも大きな成果であると考える。研究会の協議においても、「これまでは自分の校種における指導のことしか考えてこなかったが、地域創造学においてはこれまでの校種でどのようなことをやってきたのかという視点で系統性を考えて授業づくりをしていく視点が大切だと感じた」という声が高校や中学校の教員から聞かれた。このような視点は、地域創造学に限らず、教科の学習においても大切にしていかなければならないものであり、日常の授業改善の意識の向上につながっていくものであると捉えられる。

これらの授業交流等での成果を踏まえて、第３年次学校公開研究会を実施し、県内のたくさんの方々から御意見をいただいたことも、教師の授業づくりへの意識を大きく変えることにつながっていると考えられる。

第３年次学校公開研究会　参観者感想より

・小、中、高の１２年間を通して、町全体で目指す子どもたちの育ちの姿を俯瞰しながら、地域創造学において育成を目指す資質・能力を明確にし、５つのステージにおける社会的実践力について系統性を明らかにしている点が、大変勉強になりました。（小学校参観者）

・自分事として地域を考える生徒の姿勢に感心しました。学習活動を支える思いこそ、大切なのだとあらた

めて考えさせられました。私の学校でも、県内どこの学校でも取り組めるモデルを見せていただきました。町と一体となって取り組んだ教育課程の成果が、どのように現れていくのかとても楽しみです。来年度の公開にもぜひ参加させて頂き、勉強させていただきたいです。（中学校参観者）
・授業を参観し、生徒の興味・関心と地域課題を関連させるための工夫について考える機会を得ることができました。「地域創造学」として探究のプロセスを６つに分け、一つ一つを確実に実践されてきたことが、生徒の姿から分かりました。生徒が探究のプロセスを知識・技能として獲得できる授業であれば、未来社会を育む力が育まれるのだと感じました。（高校参観者）

ウ　保護者等への効果

地域創造学の本格実施に関わって、小学校児童の保護者からは、児童が調査してきた地域のよさに関わる特徴をもっと地域全体に発信し、地域を盛り上げてほしいという声があることが報告されている。児童生徒がこれからの地域の在り方や、よりよい社会作りについて考え、地域の活性化に資することは地域創造学のねらいの一つでもあり、今後このような声がさらに増えることが予想される。

また、地元のケーブルテレビや新聞社等の報道機関とも連携し、公開授業等を頻繁に情報発信したことで、保護者を含む地域の方々の地域創造学への理解が深まってきている。小・中・高を通じて児童・生徒の地域創造学におけるフィールドワークの回数が大幅に増加したことや、プロジェクト発表会などで地域の方々や保護者を巻き込んだ活動を行ったことも、地域全体に地域創造学を理解していただくことにつながった。今年度はじめて実施した地域創造学協力者会議において、ゲストティーチャーとして授業に協力していただいた地域の方々からは、「子どもたちと地域創造学を通して関わることができるのがうれしい」、「地域を題材に学習していくことは大切であり、地域住民である自分たちにとってもうれしいことだ」など地域創造学の取組を評価する声があった一方で、「ゲストティーチャーが参加する前の段階の事前学習をもっと充実させるべきだ」、「どのような力を育成しようとしているか、そのためにゲストティーチャーにどのようなことを求めているのかについて、授業前にもっと教師と共通理解を図りたい」など指導計画の在り方に関して助言してくださる方々も多く見られた。地域創造学を通して、地域全体で児童・生徒を育てていこうという気運が着実に高まり始めている。

会議でいただいた様々なご意見や、生徒や保護者等への「地域創造学」に関わるアンケートの結果も参考にしながら、教育課程全体のさらなる改善を行っていきたい。

ゲストティーチャーとして授業に関わっていただいた町民の声（地域創造学協力者会議より）
・（プロジェクト）をやらされているのではなく、自分からやるのだという姿勢が感じられた。
・孫が家で地域創造学の話をするようになった。
・（プロジェクト報告会等で）、成果だけを発表する必要はない。失敗も学びである。
・発表のために学習するのではなく、楽しんでほしい。
・地域の方は子どもたちと関わりたいと思っている。ただし上手に伝えられるわけではないので先生が間に入るとよい。
・基礎的なことは自分で調べさせ、その上で質問させたらよい。事前学習が大事。
・どこまで質問に答えていいか難しいところがあった。
・生徒は質問すれば答えがもらえると思っているが、そうではなく共に考えていくことが大事だということを知ってもらいたい。
・子どもたちに考える力が必要。教師はヒントを与えてほしい。

７　今後の研究開発の方向について

これまでの研究により明らかになった問題点と課題について、以下のように捉えている。

（１）新教科「地域創造学」実施に伴う、評価の在り方の検討について

地域創造学を含む教育課程が、児童・生徒にどのような影響を与えるのか、適切な評価の在り方を検討している。今年度は、教育達成測定を実施し、設定した質問項目への回答状況を通じて、児童生徒の学習の変容や、学習への達成感をとらえることに取り組んだ。今後も他の協力校との比較分析結果や教師の見取りとあわせて、分析・検証を継続していく。

また、地域創造学におけるよりよい評価を検討する上で、設定したパフォーマンス課題やルーブリックがその学習単元の内容に対して本当に適切なものとなっているのか、さらにはそれらを活用して、学習者が自己の学習についてメタ認知的に振り返ることができるような「学習者のための評価」にできているのかという部分に関して、引き続き検討を行っていく。

さらに、１２年間の学びであるということを意識しながら、学年や校種を越えて児童生徒がどのように変容したのかについて長いスパンで評価していく。全体的な変容だけでなく、一人の児童生徒がどのように変容したのか、成果にたどり着くまでに、失敗を含むどのようなプロセスがあったのか等について継続的に見とっていくために、児童生徒の学びの過程を蓄積するポートフォリオを有効活用した評価方法を検討していく。

上記に示した評価方法を充実させていくのはもちろんのこと、児童生徒に社会的実践力を育成していくうえでは、日常の授業において児童生徒の学習状況をしっかりと見とりながら、常に指導改善を図っていく「指導と評価の一体化」を進めていくことが不可欠である。単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童生徒の現状を踏まえ、どのような言葉がけや支援を行うことが適切なのかについて、教師は常に考え続けていかなければならない。

（２）地域創造学を中核とした１２年間の教育課程の編成について

今年度は、昨年度に試案として作成した社会的実践力の系統表や年間指導計画、学習指導要領解説に基づいて授業実践を行ったが、年間指導計画の内容が社会的実践力を系統的に育成していくものになっているか、更に検討していく必要がある。具体的には、育成したい資質能力と単元の学習内容の整合性、単元の学習内容の学年間・ステージ間の整合性、地域創造学と各教科の系統性などが挙げられる。

また、共通単元を実施する上で、学校間の協働学習等の在り方についても検討を継続していく。指導方法に関しては、児童生徒の思いや考えに寄り添った指導の在り方、結果や発表よりも、学習過程を重視した指導の在り方をさらに追究していかなければならない。小学校から高等学校までの１２年間を見通した上で、社会的実践力の系統表と照らし合わせながら、どのような内容が以後のどの学年やステージにつながっていくものなのか、そのために各学年や各ステージにおける指導の在り方はどうあるべきなのかについて、校種を越えてさらに議論を重ね、内容の修正や指導の改善を行っていく。

（３）異校種間連携について

第三年次は、全体会や各部会、授業研究会の相互交流等を通して、校種を越えた１２年間の学びであるという視点を大切にしながら、異校種の教員同士が活発に議論を重ねた。その中で、社会的実践力の系統表を基に、効果的な異校種間連携を含んだ単元計画作成について、どのように修正していくべきなのか、模索し続ける教員の姿が見られた。これはまさに「指導者の協働」の姿であり、このような経験を通して、本町の教員には、異校種の学習内容や指導の在り方に刺激を受け、学びながら、よりよい授業づくりをしていこうという意識が着実に高まってきている。

また、授業場面においては、中学生のプロジェクトの発表を小学生が参観する場が設けられるなど、異校種の児童生徒が学び合う「学習者の協働」の姿が見られた。異校種の先輩や後輩と共に学び合うことは、児童生徒の学習意欲に間違いなくプラスの刺激を与えるものと考えられる。このような「学習者の協働」の場を年間指導計画にいかに意図的・計画的に位置付けていくのかが大切になってくる。

地域創造学は小・中・高の１２年間を通して児童生徒の社会的実践力を育成していく教科であり、校種を越えて、教師及び生徒がいかに学びをつなげていくのかが大切になってくる。上記の「指導者の協働」や「学習者の協働」の姿は１２年間の学びである地域創造学だからこそ表れてきたことであり、地域創造学がまさに異校種間連携を促進する仕組みそのものであることを表しているととらえられる。今後も指導者や学習者の関係をさらに密にし、より効果的で、持続可能な異校種間連携の形を追究していきたい。

（４）新教科「地域創造学」の教科書作成作業への着手について

第３年次までに作成した教育課程における授業実践等を通して、児童生徒が主体的に地域造学の学習活動を進めていくための教科書の必要性が明らかになってきた。研究開発学校研究協議会での指導助言に基づいて、探究のスタイルや事例等をどのように教科書に示していけばよいのかについて、社会的実践力の系統表や年間指導計画、学習指導要領解説とも照らし合わせながら、学校・地域・教育委員会が協働して、地域に特化した独自の教科書作成に着手していく。

（５）第４年次学校公開研究会の実施について

研究指定期間である４年間のまとめとして、最終年度である第四年次までの研究成果を基に研究発表、授業公開、授業研究会を行い、「総合的な学習（探究）の時間」の枠組みに収まらない「地域創造学」ならではの実践を公開し、県内外の教育関係者らから御意見をいただき、次年度以降の取組に生かしていく。

（６）持続可能なプログラムの構築について

今後も持続可能なプログラムにしていくために、これまでの取組が生徒や地域・保護者にとって本当に効果的なものになっているか、指導する教員にとって無理のないものになっているかなどの検証を行い、取組の内容を精選していく。